
紅の蓮を救い出せ

桃野アリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の蓮を救い出せ

【Nコード】

N8960Y

【作者名】

桃野アリス

【あらすじ】

少年陰陽師現代パラレル物です。

まだまだ稚拙な文章ですが、応援していただけたら幸いです。

安倍清明が息を引き取った数十年後、安倍昌浩が黄泉へと旅立った。そして時は流れ、平成。

安倍家は裏で陰陽師家業を営んでいた。十二神将は平安時代から変わらず、昌浩の遺言で安倍家に仕え続けていた。だが、十二神将最強にして最凶の煉獄の将、勝蛇は心を開かなかった。

そんな時、安倍家に双子が生まれる。双子は、勝蛇を恐れず笑いかけたのだった。

双子は育ち、中学生になる。ある日、兄が勝蛇に言った。

「俺、安倍清明の記憶持つてるぞ。言い忘れてたが」

平安時代と変わらない狸の兄・春輝と、

「ああ、あの安倍春輝の弟か」「弟言っちな!」

勉強より運動が得意で、優等生の春輝に劣等感を持つ昌輝。

さらに、昌輝には何やら秘密があるようで ?

夢（前書き）

始めまして、桃野アリスと申します。

2次創作作品を投稿するのは初めてなのですが、温かく見守って頂けたら幸いです。

夢

十二神将の主であった安倍清明がこの世を去り、時を経て同じくこの世から去った安倍昌浩。

黄泉の路へと旅立つ時、共に2人は己を見る家族と人外の者達に微笑んでいたという。

そして、残された十二神将は、昌浩の子孫に代々仕える事になる。

それは、生前の昌浩の意志であった。

清明と昌浩の他にも、多くの人が十二神将の主となったが、十二神将勝蛇は心を開かなかった。

いや、この表現では語弊があるかもしれない。

勝蛇が近寄るだけで、子供どころか大人でさえも恐怖に身を竦ませた。

昌浩と彰子の息子の明昌は怯えず、霊力が強かった為十二神将の主となったのだが、明昌に子供が出来ることはなかった。

勝蛇が最後に心を開いたのは、明昌だっただろう。

そして、数え切れないほどの時が流れ、今は平成である。

???

何も見えない闇の中。

男は一人、そこに佇んでいた。

深い紅色の髪、黄金の瞳。長身で、逞しい体躯。

人間とは比べ物にならない程綺麗な顔立ち。

だが、その顔が笑う事は無い。

何をするでもなく、ただそこに居続ける。

不意に、男は目を見開いた。声が聞こえた気がしたのだ。

紅蓮！

それは、懐かしい、誰よりも大事な人の声。

もっくんやーい

だけど、もう居ない人の声。

分かっている。この声が、もう俺の名前を呼ぶことはない。

だって、俺は旅立った瞬間を見ていたのだから。

これは幻聴なのだ。

そう思い耳を塞いでも、呼ぶ声は止まらない。

覚えている。

そか、俺、生きてるんだ

呆けたような声を。

覚えている。

お前、俺の目にならない？

もっくん、俺の目になってよ……

嬉しそうな声と、泣きそうな声を。

……覚えている。

何言ってるんだい。：ああ、また痛そうな顔してる。馬鹿だなあ。痛いときは、痛いって言っていていいんだよ？

俺を救ってくれた声を。

ばかだな。俺がいるって言ったの、独りじゃないって言ったの、お前じゃないか

例えもう居なくなってしまうたとしても、それでも俺は。

見た者に元気を与える笑顔を。

孫言つな、と憤慨していた声を。

一度わすれてしまった記憶だけど。

もう絶対に、忘れない。

夢（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

諦め

「勝蛇」

目を開けると、肩に付かない位置で切りそろえた漆黒の髪に黒曜の瞳を持つ女性が覗き込んでいた。

彼女が身体を反らすのと同時に、男は身を起こした。

男は十二神将、勝蛇。驚恐を司る十二神将最強にして最凶の闘将だ。

勝蛇は眉を顰め、女性に声を掛けた。

「……何の用だ、勾」

「用がないと来てはいけないのか？それに、寝ていたのだから良いだろう。寝ている、という事は暇だという事だからな」

「……」

十二神将が一人、勾陳。凶将で、騰蛇の次に通力が高い。

普段は理性で力を抑え込んでいるが、怒るととても怖い。冗談抜きで。

「良い知らせだ。子供が生まれたらしい」

「……そのどこが良い知らせだ。怯えるに決まってるだろう」

「だが、昌浩は怯えなかったな」

黄金の瞳が微かに揺れた。

「それはそうだが……」

「正直、今のお前を見ているのは苛々する。分かったら早く行け」

「おい、俺は行くなんて一言も……」

「早く行け」

理不尽な言葉に勝蛇が思わず反論すると、遮られた。

「だから……」

「行け」

尚も言おうとすると、いつもの苦笑とは違う笑顔を向けられた。

勝蛇は内心で溜息を吐く。堂々と吐かないのは、彼女が恐ろしいからではきつとない。

「……どうせ怯えるぞ」

一言呟き、勝蛇は姿を消した。

「今度は大丈夫だと思うがな……」

その言葉を聞く者はなかった。

???

勝蛇は現世に降り立った。

平安時代と場所は同じだが、何度も建て返され、土地が異様に広い普通の家となっている。

「……勝蛇、居るのですか？」

『……ああ』

呼ばれた勝蛇は隠形を解き、顕現した。

安倍吉昌。何の因果か、清明の息子 昌浩の父である吉昌と同名だという事位しか記憶に残っていない。

勝蛇が呼ばれる事は全くと言っていい程なかったからだ。

「子供が産まれました。勾陳も先程会いに行っていたようです」

「……そうか」

勾陳も会いに行ったのか、泣かれなかったのだろうか。

そんな事を考えていると、吉昌が言った。

「そうそう、双子なんですよ」

「……双子？」

「ええ、忘れてたのですがね」

そんな重要な事を忘れるなど言いたい。

地味に清明の血が受け継がれているのだろうか。

「隣の部屋に居ますよ。六合が見ています」

「……分かった」

さっさと会って、異界に戻ろう。

赤子は、勝蛇の神気に怯えて、泣くに決まっているのだから。

諦め（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8960y/>

紅の蓮を救い出せ

2011年11月26日22時50分発行